

月報 1号

発行所

青丘文庫

神戸市須磨区千歳町4丁目1-3
〒654 エバーグリーンビル5F
電話 (078)-734-5989 番



「月報」発刊に当って

新しい年に成りました、青丘文庫も遅々たる歩みではありますが、いつの日にやゝ始めてから一五年、現所在地に移つてからもう三年にもなり、執筆も二万頁を超えるに至りました。

数年前から二つの研究会を持つようになり、それらの発表成果を「在日朝鮮人史研究」「朝鮮民族運動史研究」に掲載して刊行して参りました。ところが毎月一冊づつの発表をすべて収めることは出来ませんので、その要旨を一ページ位づつまとめて頂いて載せ、また次回の研究会予告、新着圖書、京阪神の朝鮮関係の諸委員会などの案内も、できるだけ掲載して「月報」を刊行することになりました。

どこまで続くか、心もとないのですが

関係者諸氏の御協力によつて、できる限り長く続刊して行きたいと望んでおりますので、なにとぞよろしくお願ひ致します。

一五周年記念という訳でもありませんが、できれば阪神間（西宮北口——阪急六甲）のもうすぐし交通の便利が如く、掲載させた。またこの機会に韓国法人か、社団法人にしたいものと計画し、いろいろと研究しております。

長い間の滞ですが、達成できれば、これを遇する大きな喜びは無いと思っております。どうか、絶大なる御協力を願うてやります。

韓哲暉

△ 研究会報告

在日朝鮮人運動史研究会

関西部会の十一月例会（第六四回）では、伊丹市立北中学校朝鮮学級について、日韓の公教育の中の朝鮮人教育——というテーマで、鄭良三氏が報告した。伊丹の朝鮮人は、戦争激化による伊丹稲行場の拡大計画

で強制徴用された者が、やがて猪名川沿いに居住し、朝鮮人部落を形成したことに始まる。

解放後、これら朝鮮人居住地では、いくつかの国語講習所ができた。国語講習所は、やがて朝鮮初等学園と改称され、さらにこれらが統合されて神津朝鮮人小学校となった（一九四七年）。朝鮮人学校の第一歩は、朝鮮伊丹初等学校として認可されたが、さらに一九四九年第二歩は、肉親令の発布を受け、翌五〇年八月、伊丹市側と朝鮮人側代表との間に覚書がかわされ、伊丹市立神津小衆津分校として設置することになった。

一方、この第二歩は、肉親令により、大阪朝鮮中学校、大阪東部学院の生徒は学校から追われることになった。そこで朝鮮人団体協議会が指導し、① 伊丹右住の生徒は伊丹市内の日本の中学校に集団入学させること ② 最低限の民族教育を保障すること ③ 朝鮮人教員を採用することの三項目の要求をもって、伊丹市教育委員会と交渉した。その結果、一九五〇年一月に集団入学が認められ、一年から三年まで合計四四名が入学した。

続いて、朝鮮課目（国語、歴史、地理）の設置と朝鮮人教員採用の断りなく行われ、「復興団」や「韓城同郷会」などが展開された。そして、同年三月には朝鮮語講習所を設置し、放課後に講師を派遣することが認められ、さらに八月には、二名の教員を採用することが認められ、九月一日に朝鮮学校は正式に発足した。

朝鮮学校の課目は、国語、地理、歴史であったが、このうち地理については、五〇年代で廃止された。授業は正規の授業時間内に行われた。すなわち、体育、保健、音楽、職業の時間を利用し、バラバラに分かれたクラスから朝鮮人生徒だけが抜けて、朝鮮課目を受けるしくみだ。大阪のようには、課後にやるのとは異なっていた。ただ、一九七二年（七三年）に限っては、放課後のみの授業形態であった。なお、六〇年代には入学生の質が変わったため、基礎学習班が設立された。朝鮮人教員は、覚書に基づいて採用された。教員の条件は適格審査に合格した者で、身介は講師、待遇は月給制となっていた。そして教員の選考は、実質的に朝鮮人側の「ゲモニ」で行われた。北中での朝鮮人教師は、朝鮮課目の授業とともに

朝鮮学生の手指導を行ってきた故、財界会に加入して学校業務も行うなど、待遇は時間講師であったが、早稲は故郷と変わらなかつた。

この伊丹北中の朝鮮人学級は、一九七五年講師の鄭判秀氏が不当解雇され、以来閉鎖されたままに居つてゐる。鄭判秀氏は解雇に抗議し、神戸地裁へ解雇処分取消の訴えを行い、裁判闘争の途中である一九八四年三月に他界された。しかし裁判は「鄭判秀先生の裁判を支援する会」などによつて継続中である。

伊丹北中の朝鮮人学級は、時代の制約はあったとはいへ、その存在意識は大きかつた。とりわけ、一時期は朝鮮人学校体系の一翼になつてゐたともいえる、管理面からいえば、朝鮮（朝鮮教育会）館連が当初は経営、管理してゐたがその後そこからはずれ、独自の歩みをしてゐたといえる。

伊丹北中の方式、すなわち正規の授業時間内に朝鮮授業をすることは民族教育を保障する観点から積極的に評価できる。しかし、時代の流れからして、今日ではかなりの困難を伴うものでないだろうか。

この朝鮮学級に対する日本人教員の排外性、行政当局の無責任性、あるのは犯罪性については、厳しく指摘されなければならぬ。

△朝鮮民族運動研究会

一月例会（第三回）では、「建國準備委員会の構成メンバー」について、李景珉氏が報告した。

解放直後の政治情勢と民族運動の系譜を考察する。この時期は朝鮮民族にとって政治活動がはじめて全面的に解禁され、独立、建國の夢が現実となり、具体的内容となつてゐた。また、同時に、政治にたいする民衆の監視の目が光つてゐた時期でもある。

建國準備委員会は、朝鮮統治府公認の国内の治安維持を目的として設立した組織である。しかし、急進派をはじめとする「建軍」の幹部たちは、それを単なる過渡期の治安維持の機構とは思つてゐなかつた。このころには、当時「国内にとどまつてゐた多数の民族運動の指導者たちが結集されてゐたし、みんな新しい国づくりの熱意をもつてゐたからである。

そこで報告では「建軍」参加者たちを思想的に右派、石派民族主義者、左派民族主義者、共産主義者に分類して日帝下の民族運動史の延長として捉えることを試みる。解放は「盗人のように不意に」朝鮮民族の前に訪れたという、当時の政治情勢が混沌としていたのは、基本的には朝鮮民族が白人解放を勝ち取ったからだともいわれる。しかし、解放が連合国の勝利の産物であるとしても、それを日帝下の連綿と続いた抵抗運動ぬきに語ることはできない。連中は三・一運動にはじまり、それ以後の共産主義運動、新幹会運動また農民組合運動などの脈絡を軸として考察しなければならぬ。

「建軍」は中央においては「人民共和國」に、地方においては「人民委員会」となり、四五年から四六〇まで全朝鮮に決定的な影響を与える。しかし、それについての研究は、資料の制約が大きく、いまだに明らかにされないところが多い。

今日は「建軍」参加者一五〇人を中心に「建軍」の思想的分布を考えるのにとどめる。

次年度研究会の案内

(一) 在日朝鮮人運動史研究会関西支部会例会

報告者 福田雄一氏 (一九八五年一月一三日 二時)

テーマ 「GHQ下の在日朝鮮人強制連遷の問題について」

(二) 朝鮮民族運動史研究会例会

報告者 飯沼二郎先生 (一九八五年一月九日 三時)

テーマ 「山梨大焼野取事件」について

新着図書案内

韓国思想大系 V

成均館大学出版部

韓国外交秘録

斗星新聞社

北京抗日烈士伝

黒龍江省社会科学院

北平五烈士追慕会

斗星五烈士追慕会

旧韓軍旅以制杖外列強

韓国研究院

韓国史講座 V 近代篇

李光麟

韓国民族主義論序説

滝沢春樹

朝鮮戦争一八九(九冊)

原書房

其の他